



周頌、農事詩の祭祀について

詩序と詩本文から見て

東洋史学専攻 藤 田 忠

一、序

二、周頌の農事詩各篇

1. 臣工
2. 噫嘻
3. 豊年
4. 載芟
5. 良耜

三、結び

一、序

周頌三十一篇は周の宗廟における楽歌であり、その成立について、鄭譜は

「其作在周公摄政、成王即位之初」

という。朱子「詩集伝」も、この鄭譜を継承しながら、

「頌者、宗廟之乐歌、……多周公所定、而亦或有康王以後之詩」

とする。只だ詩制作の時代を康王以後の詩もあるかもしれないと、幾分下げたものを含ませるだけである。ところで、周頌の内容を見ると、一概に「宗廟楽歌」にかたづけられるわけにはいかない。実に種々の祭祀—祭祀の対象、祭祀の場所、季節など—が含まれている。たとえば、小雅の楚茨、信南山、甫田、太田と同じく農祭詩の部類に属する詩篇、「昊天有成命」・「武」・「酌」・「桓」・「賁」・「般」の六篇がもと一つの舞曲であったとする、いわゆる「大武楽章」の詩篇、先公や先王を祀る詩篇、当代即位のときの特別の宗廟歌の詩篇などにわかれる。

周頌の農祭詩については、その農耕形態や生産関係から論じられることは多いが、祭祀そのものの自体をとりあげることは殆んどない。そこで、この小論では周頌の農祭詩の祭祀について述べてみたい。その際に、詩経には詩序がそれぞれ附してあるのに、詩序と詩篇の内容との関係については

余りふれられない。はたして詩序は詩の内容と全く関係ないのだろうか、その点も併せて、考えてみることにする。

二、周頌の農事詩

周頌の農祭詩と称されるものは、「臣工」・「噫嘻」・「豊年」・「載芣」・「良耜」^③の五篇がある。これら五篇の詩の解釈は既に多くの先学によってなされており、またそれぞれの解釈の相違についても広く知られている所である。その解釈の相違をとりあげて比較することも決して意味のないことではないが、ここでは序にのべた様に別の視点から、今一度「臣工」以下の各篇について、本文だけでなく詩序との関係からも見てゆくことにする。

1. 臣工

嗟嗟臣工、敬爾在公、王釐爾成、来咨来茹、嗟嗟保介、維莫之春、亦又何求、如何新畲^④、於皇来牟、将受厥明、明昭上帝、迄用康年、命我衆人、庀乃錢鎛、奄觀鉅艾、

この詩中に臣工^④ 保介^⑤ 衆人^⑥などの語があって、これらの語の解釈によって意味がかわってくるが、錢、鎛などの語でわかるように、多くの田器（農器具）があらわれており、しかも「於皇来牟、将受厥明」の句があるところから農業に関する詩であり、豊作を祈るものであることは明らかである。ところで、詩序に「諸侯助祭、遣於廟也」とあるが、詩篇の内容とあまり関係がないようにみえるが果してそうだろうか。また、この諸侯達はどんな祭祀に参加したのだろうか。

鄭箋は「周公、成王之時、諸侯以礼春朝、因助天子之祭、事畢将帰、天子戒勅而遣之於廟、詩人述其事而作此歌焉」という詩序の正義にあらわれているように、来朝した諸侯が帰国するに際して、君臣の礼を正すために廟中で諸官卿大夫を勅した詩であるとする。朱子は鄭箋や詩序が詩の本文に直接でてこないために、この詩は「戒農官之詩」であるとする。しかし、鄭箋にしろ、朱子にしろ、両者とも明解であるとはいえない。そこで、今一度詩中にかえって考えてみよう。

この詩の第五句以下の「嗟嗟保介、維莫之春、亦又何求、如何新畲^④」が一つのヒントを与えてくれる。毛伝は「田二歳曰新、三歳曰畲^⑤」とだけしか注していないが、鄭箋では、「保介」を『礼記』「月令」の孟春の條に

「天子親載耒耜、措之於參保介^〇之御間、率三公九卿諸侯大夫、躬耕帝籍」

とあるのに比定して、籍田の礼での祈穀の祭祀とする。そのために次の六句「維莫之春」（鄭箋莫、晩也）と連結しがたいために、「周之季春、於夏為孟春」として、この詩は夏歷を用いているとして、上の「月令」の文章につづけようとする。しかし何故に周の廟歌に夏歷を用いるのかの説

明はないし、また周頌で夏歷を用いている例は他に見えぬ。だから別に解を求める必要がある。

この六句の「維莫之春」は正義に「暮晩者古暮字作莫、説文云日在艸莽中為莫」とあるように、「莫」は「暮」と解して「暮春」、即ち「季春」とする方がよいと思われる。「季春」だとすると『礼記』『月令』の季春に

「天子始乘舟、薦鮪于寝廟、乃為麦祈実」

とあり、また

「是月也（季春）、命工師、令百工、審五庫之量……百工咸理、監工日号、毋悖于時」

とある。この『礼記』の季春の條は丁度詩の九・十句目の「於皇来牟、将受厥明」と、詩中に見える鋤、鍤等の農器具の製作なり、管理なりを行なうのに合致する。また、鄭箋を一気に続けて解釈せずに、分ける例は後の噫嘻にも見えている。この様に解すれば「思文」の「貽我来牟、帝命率育」と同じように解することができる。「思文」の詩序には「后稷配天也」とあるように、周の始祖とされている后稷^{オク}が周の民に來牟＝嘉禾^{オク}を貽り与えるのは（上）帝の命によるものであるとする。この「臣工」の詩も、「后稷の徳（教え）をよく守りつづける周人に上帝が康（豊）年を約束してくれる。そのためにはしっかりと農器具を管理し、整備するように、」と諸侯に告げるのである。（十一句より十五句）。すなわちこの「臣工」の詩は鄭箋が言う様に諸侯が帰国する際に、君臣の礼を正すために廟中に於いて諸官卿大夫を勅したものではなく、孟春から季春にかけてのことを宗廟で、祈年祈穀の祭祀を行なう時の歌である。その意味では、朱子の「戒農官之詩」の注は大まかであるが、上の様な祈年祈穀をおこたらぬ様に農官に戒めるととると、詩序を含んだ解といえる。

2. 噫 嘻

噫嘻成王、既昭假爾、率時農夫、播厥百穀、駿發爾私、終三十里、亦服爾耕、十千維耦

この詩については、第一句の「成王」を毛伝の「成是王事也」や鄭箋の「能成周王之功」のように「成」を動詞にとるか、朱子のように「成王」と人名にとり、その根拠として「蓋成王始置田官、而管戒命之也」とするか、また、末句の「十千維耦」を奴隸耕作が行なわれた状況を表わしたものだとして、古代奴隸制^⑦の証拠とするかなど、「臣工」と同様に多くの問題を含む詩篇である。詩の内容をみると、上の様な問題はあるにしても、播種と耕作とをいうだけである。

詩序は「春夏祈穀于上帝也」とある。この序に対して鄭箋は上の「臣工」と同じく、『礼記』『月令』の「孟春祈穀于上帝」を引き、夏期に祈穀する文がないので、『左伝』桓公五年の「夏則龍見而雩、是与」を「月令」の文に続けて引用している。朱子は「此連上篇（臣工）、亦戒農官之詞」と

する。しかし、この詩の朱子注は、詩篇中に「臣工」篇のように農官に戒める詞はあらわれていないし、第2に「成王」を人名とする根拠に、成王の時に始めて田官をおいたからであろうとするのも、詩経の中では后稷を祖神化^⑧して、代々農耕を重要視してきた周人にとって、「成王」時代になって始めて田官をおくというようなことは考えられない。むしろ、播種と耕作とを歌っている所からすると詩序の「春夏祈穀于上帝」の方が詩の内容に合致すると思われる。一般的に考えてみても春にその年の豊穡を祈って祭祀を行なったり、秋に感謝の収穫祭を行なうことは、鄭玄が引用した『礼記』月令を引き出すまでもないことで、他に『周礼』春官、籥章などにも見えているようによく見うけられる。ただ問題は夏期に上帝に祈穀する祭祀が行なわれるかどうかである。鄭箋は『左伝』の文章によって、雩祭をいうが、雩祭とはそもそも何かというと、『礼記』月令の仲夏の條には

「命有司、為民祈祀山川百源、大雩帝命用盛樂、乃命百果、雩祀百辟卿士有益于民者、以祈穀實」

とあって、旱が続くときに、よく雨雲を興す山川の百源を祈って、求雨の祭を行なうものである。

『礼記』では仲夏になっているが、雩祭そのものの時期は『左伝』に

「秋八月大雩」(僖公十一年)

「秋九月大雩」(僖公十三年)

「冬大雩」(成公七年)

「秋七月上辛大雩」(昭公二十五年)

とあるように、定まった時期に行なうものではなく、旱魃がある時に「魃」の神の怒りを静めるために行なうものである。旱魃の怒りは大雅、雲漢にも「旱魃為虐、如焚如焚」とあるように、周人にとって非常に恐いものであった。それでは鄭箋は何故にこの様な時期の定まらない雩祭をこの詩序に採り、『礼記』月令の祈穀の文章と結びつけたのであろうか。

それはおそらく次のような関係からではなかろうか。『礼記』月令の「祈穀于上帝」の鄭注は「謂以上辛郊祭天也、春秋伝曰郊祀后稷祈農事」とある。即ち、郊祭と祈穀とは本来二祭であるものを、鄭玄はそれを郊祭一祭とみなす。だからその説明に『左伝』襄公七年の文を引用して、補足説明している。

一方雩祭も「雩祭謂為壇南郊之旁、雩五精之帝、配以先帝也……百辟卿士、古者上公若勾芒后稷之類也」とあるように郊に於いて行ない、勾芒や后稷を祀って豊作を願うものである。すなわち郊祭は本来天を祀るものであるはずのものが、周頌の中では、周の祖先神として位置づけされた后稷を対象にして祭祀が行なわれ、雩祭も農業行事の中の1つで、農業神を対象にしたもの(ここでは勾芒、后稷など)である。この様な両者の共通点から豊作を祈る二文を繋いだのであろう。

以上の様に考えると、この「臣工」の詩は「成王」を「王事を成す」とするか、人名とするか問題は — 特に詩の制作年代を考える場合には — あるが、この詩序は従来いわれている様に詩の内容と余り関係ないものではなく、耕田と播種を通じて豊年を祈る祭祀の念を忘れずに農業に専念することを勧めるもので、そこに雩祭をもちだしたのは旱魃の恐しさを味わない為に日常から農耕にいそむ農民の姿を歌ったものであろう。ただ詩文の方では現実の耕作の方に重点がおかれているだけのことである。

3. 豊年

豊年多黍多稌、亦有高廩、萬億及秭、為酒為醴、烝畀祖妣、以洽百礼、降福孔皆、

この詩は七句の短詩であり、なおかつ「載芣」の詩の後半部と語句が酷似しているところから、この詩自体を切りはなしてとりあげられることはあまりない。詩中の句の「萬億及秭」の様な収穫を得る土地は誰のものであるのか、またその様な収穫を得る大土地の耕作担当者は誰なのか、などの問題はあがあるが今は触れない。

詩序は「秋冬報也」とあり、秋、冬の農事が無事終了したのを感謝して宗廟で祭祀を行なり楽歌である。鄭箋は「報謂嘗也、烝也」とあって時祭の意にとる。朱子は同じような意味であるが、「此秋冬報賽田事之楽歌、蓋祀田祖先農方社之属也」としている。この朱子注の後半部は断定はしていないが祭祀の対象として田祖以下をあげている。それでは朱子は田祖、先農、方社とは何をさしているのかというと、小雅、甫田の第二章「以御田祖」の注に「田祖、先嗇也、謂始耕田者、即神農也」とあり、先農については直接に見えない。方社は小雅、甫田の「以社以方」や大田の「来方禋祀」の注で、「社、后土也、以句龍氏配、方、秋祭四方、報成萬物」、「禋祀四方之神而賽禱焉」とある。朱子によると、神農や句龍や四方の神に、報賽の祭をする歌とする。

鄭箋の時祭の嘗、烝というのは『礼記』祭統に、

「凡祭有四時、春祭曰雩、夏祭曰禋、秋祭曰嘗、冬祭曰烝」^⑪

とある秋祭、冬祭に該当するものである。ただ祭統には祭祀の対象が無いのでわからないが、『周礼』春官「大司馬」に

「以祠春享先王、以禴夏享先王、以嘗秋享先王、以烝冬享先王」

とあるように、四時の祭祀の対象は、先王（祖先）である。それは『周礼』の様に制礼後の規定だけでなく、『詩経』小雅、天保にも「吉蠲為饗、是用孝享、禴烝嘗于公先王」と見えてあり、后稷より以下の公、先王を祭祀することをいう。この豊年の詩にも「烝畀祖妣」という一句があり、明

らかに鄭箋はこれらの意を汲んでいる。朱子の注は報賽の祭りをするという点では、この詩意を得るが、祭祀の対象で少し欠けていない。なお、この菅、烝祭については『春秋繁露』四祭篇にくわしく、

「古者歳四祭、四祭者因四時之所生熟而祭其先祖父母也、故春日祠、夏日禴、秋日嘗、冬日烝、此言不失其時、以奉祀先祖也。……嘗者以七月嘗黍稷也、烝者以十月進初稻也、此天之經也、地之義也」

とある。もちろんこれは漢代のものであり、礼世界の完成した中での規定であって、これをそのまま『詩経』の中にあてはめることは注意を要するが、先の「天保」にも見られるように、当時既にこの様な形での四時の宗廟祭の原型があったことを推測させる。

4. 載 芟

載芟載柞、其耕沢沢、千耦其耘、徂隰徂畛、侯主侯伯、侯垂侯旅、侯疆侯以、有嘏其鑑 思媚其婦、有依其士、有略其耜、叙載南畝、播厥百穀、實函斯活、馭馭其達、有厭其傑、厭厭其苗、緜緜其廩、載穫濟濟、有実其積、萬億及秭、為酒為醴、烝畀祖妣、以洽百礼、有飴其香、邦家之光、有椒其馨、胡考之寧、匪且有且、匪今斯今、振古茹茲、

一章三十一句からなる周頌中最長の詩である。朱子は「此詩未詳所用、然辭意与豊年相似、其用亦不殊」とする。それはおそらく、詩序に「春藉田而祈社稷也」とあるのに、詩中に社稷を祭る語句がないこと、辞意が「豊年」の詩と似ているところから、田祖方社の神に、報賽の祭りをする時の楽歌ととる二点から用いる所を未詳とするのだろう。「豊年」の詩は既に述べたように、四時の宗廟祭の歌で、祭祀の対象は祖先である。ところで、この詩にも「烝畀祖妣、以洽百礼」、「有椒其馨、胡考之寧」という語句があって、祖霊を祭祀対象とするもので、祖霊が福を降すことを祈願する詩であることは明白である。それでは、この詩序のいう「春、藉田して社稷を祈る」歌であるというのはどこからきているのであろうか。藉田については諸説が存するが、この「載芟」の詩序が藉田と解したのは顧広蒼がいうように、⁽¹⁴⁾「載芟載柞」の句より、「緜緜其廩」の句までが、その耕耘の状況を歌って、收穫にまで及んでいない部分で、民の力を借りて農耕に尽さしめて、そして神の佑助を祈るからであろうか。後半の「祈社稷」の語は詩篇中には直接にあらわれてこないが、朱子のいうように「豊年」の詩句と殆んど同じ語句を用いていることから考えれば、田祖方社の神に、報賽に属するものであり、宗廟で行なう四時の祭祀であろう。それでは何故に「豊年」のように宗廟で行なわないで、「祈社稷」となるのだろうか。『礼記』などの経文によれば、

「建国之神位右社稷而左宗廟」(祭義)

とあって、社稷は、祖先崇拜を行なう宗廟と対して右と左に祭られるものである。しかし、それは前にものべた様に礼世界の観念や規定が定まってから徐々に整備、完成していったものであり、「詩経」にそのままあてはめて考えられない。そのことは次の「良耜」の詩においてもいえるのでそこであわせて考えてみることにする。

5. 良耜

翼翼良耜、俶載南畝、播厥白穀、実函斯活、或來瞻女、載筐及筥、其饁伊黍、其笠伊糾、其鉶斯趙、以薊荼蓼、荼蓼朽止、黍稷茂止、穫之撝撝、積之栗栗、其崇如墉、其比如櫓、以開百室、百室盈止、婦子寧止、殺時享牡、有求其角、以似以續、統古之人、

この詩もかなり長文であり、しかも「載芣」と同じような語句が見える。朱子は、いわゆる經雅、經頌の分類に区分して、この良耜を、小雅の農祭詩を「或疑此芣芣、信南山、甫田、大田四篇、即為經雅」とするのに対して、「或疑思文、臣工、噫嘻、豐年、載芣、良耜等篇、即所謂經頌者」とする。『周礼』春官、籥章に

「中春昼、擊士鼓 戴經詩以逆暑、中秋夜迎寒亦如之、凡国祈年于田祖、歛經雅、擊士鼓、以樂田畯、国祭蜡則輪經頌、擊士鼓、以息老物」

とあるところから、「詩経」のどの篇を經風、經雅、經頌にあてはめるか、また「七月」一詩にその全てが備わっているのだとする説などある。朱子はこれにもとづいて、農詩を分類したのであろう。

詩序に「秋報社稷」とあり、「載芣」の詩と同じく「社稷に祈る」形である。この詩の「穫之撝撝、積之栗栗」以下をさして、収穫が非常に豊作であったこと感謝する民の喜びをあらわしている。「報」とはもちろん「豊年」の詩に見える「報賽」の礼のことであろうが、ここでは祭祀を行なう時に用いる犠牲が「殺時享牲」と具体的にあらわれている。この様に「牲」を祭祀に供えるのは、『礼記』に

「天子社稷皆太牢、諸侯社稷皆小牢」(王制)

「社稷太牢」、(郊特牲)

「季夏之月、命四監、大合百鬼之秩芻、以養犧牲、令民無不咸其力、以祠社稷之靈、以為民祈福」(月令)

とあり、また『周礼』にも

「陰祀用黝牲毛之」(地官、牧人)

「以血祭祭社稷」(春官 大宗伯)

とあるように、社稷での祭祀に於いてである。「載芣」・「良耜」の二詩ではいずれも社稷に祈るもので、詩の内容からみると、豊作をよろこび、酒宴を開催して、一年の労をねぎらう習慣がずっと続けられてきたのであろう。それが「載芣」の「匪且有且、匪今斯今、振古如茲」の句であり、「良耜」の「以似以統、統古之人」の句であろう。この様に収穫祭においては社稷に祈り、豊作を祈る場合には、宗廟で祖先の霊の加護を頼むのである。

朱子が「載芣」の所で、「此詩未詳所用、然辞与豊年相似」としたのは、すでに触れた所であるが、より根本的には「社」と「稷」と対照されていたものが、「稷」が周の始祖である后稷と結びつき、その上「社」も「稷」も土地神とも関係が深いところから「社稷」と合称されてしまい、祈年祭と収穫祭の対象も区別しがたくなってしまい、そこに混乱が生じたのであろう。その点、詩序は詩篇中の語句がきわめてよく似ていても、その詩が使用される廟歌としての性質をわきまえてつけられたものといえよう。

三、結 び

周頃の農祭詩といわれる五篇をみてきたが、詩篇の祭祀と、詩篇の内容と詩序との関係を要約すると次の様になる。

1. 臣工

この詩は「后稷」を宗廟で祭祀して、祈年祈穀を願うことを歌ったものである。詩序は一見すると詩中の内容に関係がないように思われがちだが、祖先神としての后稷が豊作に及ぼす影響力を忘れぬ様にして農業に勤めることを更めて戒めている。ととれば詩序のもつ意味が理解される。

2. 噫 嘻

耕田と播種を中心としてのべられていて、詩の内容は祭祀そのものとは無関係のように従来いわれているが、この詩もよく詩中の意を見ると豊穰を願う農民の感情を歌う祈年祭の詩である。詩序は耕田から播種までの農作業を通して、孟春に於ける祈穀祭に、さらに旱魃の恐しさからのがれられる様にとの農民達に農作業を怠らぬ様にさせ、精神的にも怠惰にならぬ様にさせるために説いたものである。詩序の関係上、二時期に亘る祭祀をまとめて表わしてあるのはやむをえない。

3. 豊年

この詩は宗廟での四時の祭祀のうち、「管」「烝」にあたるものである。前の「臣工」・「噫嘻」の二篇とちがって詩篇中に「多黍多稌、亦有高廩、萬億及秭」、「烝畀祖妣」の語句によって、詩序との関係もはっきりと解することができる。

4. 載 芟

詩序にいう様に詩篇の前半は藉田の礼をうたい、後半部分で社稷を祀ることをいう。しかし詩中の語句で見るかぎりでは、祖霊を祈る色彩が強い。このことは「良耜」においても同じことがいえる。祖霊ならば宗廟に於いておこなわれるはずであるが、周の祖先神である「后稷」と「社稷」との関連が確立していない、混淆している社会の祭祀をうかがわせるものである。^⑩

5. 良 耜

「載芟」の詩とちがって、詩中に「殺時享牲」の句があるので、犠牲を供える社稷での祭祀であることがわかる。但し、これも前篇と同じように、社稷での収穫祭をあらわしたものと見える。

以上のように、周頌農祭詩ではそれぞれの祭祀があり、この五篇から類推すれば、祈年祈穀祭は祖霊に豊穰を願うところから宗廟で行なわれ、それに対して、収穫祭は社稷でおこなわれていたように思われるが、その様な区別は厳密に実施されていたか否かは他の經典とも比較して考えねばならないので別稿に譲りたい。

註

- ① 王国維、『觀堂集林』卷二、「周大武樂章考」

白川 静、『詩經研究』通論篇、第四章

松本雅明、『詩經諸篇の成立に関する研究』第六章、第七節

- ② 郭沫若、『青銅時代』、「由 周代農事詩論到周代社会」 95 P ~ 126 P

白川 静、前掲書 第三章

松本雅明、前掲書 第八章、第一節

- ③ 松本氏、前掲書 第八章 第一節では、

「周頌にはなほ、農耕をいのる『臣工』、『噫嘻』、『思文』の三篇がある」と「思文」を加える。

- ④ 毛伝、「工、官也」、鄭箋「臣謂諸侯」、集伝、「臣工、君臣百家也」

- ⑤ 鄭箋、「保介、車右也」、集伝「保介、見月令、呂覽、其說不同、然皆為籍田而言、蓋農官之副也」

- ⑥ 鄭箋、「教我庶民」、集伝「衆人、甸徒也」

④、⑤、⑥については、郭氏、白川氏のそれぞれの前掲書の他に、『詩經研究論文集』第二集、122 P ~ 142 P。

- ⑦ 郭沫若、『奴隸制時代』151 P。

“ 前掲書 96 P。

胡毓寰「從『詩經“噫嘻”篇的一些詁義說到西周社会性質」(『詩經研究論文集』第一集、所収)など。

⑧ 「思文」篇などもその1つである。

⑨ 篇章、掌土鼓瑟箏 …凡国祈年于田祖…」

⑩ 毛伝、「魃、旱神也」

⑪ 『礼記』王制にも、「天子諸侯宗廟之祭、春日禘、夏日禘、秋日嘗、冬日烝」とある。

⑫ 春と夏の祭祀の各称がかわっているのは、『礼記』(「祭統」・「王制」とも)の注に、上にあげた四時の祭は、「夏殷の時の礼」であり、周では「春日祠、夏日禘」の称に改めた、とある。

⑬ 白川氏、前掲書、283～290 P。

⑭ 吳豊生、『詩義会通』卷四引顧説。

⑮ 『周礼正義』篇章

『詩經』邶風、七月篇。

⑯ 出石誠彦 『支那神話伝説の研究』、「社を中心として見たる社稷考」(345～392 P)。

⑰ 出石氏、前掲書、参照。